
真剣で私に恋しなさい！！ - 開かれる修羅の門 -

風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！！ - 開かれる修羅の門 -

【Zコード】

Z6447P

【作者名】

風

【あらすじ】

毎日のようにイジメられていた少年　それを救った少女　この2人から始まる物語。誰よりも優しく、少しばかり泣き虫で頼りない主人公『伊織』と風間アミリーとの川神市を舞台にしたシリーズあり・ほのぼのあり・バトルあり・ギャグあり?のお話です。

運命の出来事（前書き）

初見の方はじめまして、前作を知つていらっしゃる方お久しぶりです。

とにかく頑張ります！一生懸命に頑張りますーそれはもう頑張ります！

この作品を見ていただいている皆様に最大の感謝を・・・。

運命の出会い

少年は泣いていた。

同年代の子と比べ体の小さかった少年は、イジメの対象になつた。

毎日のように繰り返されるイジメ。

数少ない友達に助けを求めた。

最初は助けてくれていた友達もいつしか助けてくれなくなつた。

少年は泣き続けた。

でもなにも変わらなかつた。

どうして泣いている?

うつむく僕に聞こえてきたのは女の子の声だつた。

「イジメられているんだ……

「うか。わたしがしかしあしてやる! つれていけ!

いきなり現われた女の子はそう言った。

「でもあこてはこつぱい、こるよ?」

かんけいない。わたしをだれだとおもつてゐるー。

「だれなの?」

わたしは・・・だ!

イジメはなくなつた。

助けてくれた女の子とは仲良くなりいつも後をついて回つていた。

それも長くは続かなかつた。

両親が事故に会い、突然引っ越しすることになつた。

いつものように泣いていた僕。

「これおまえにあげるよ

「いいの?」

「ああ、わたしといたおもいでだ」

「うん!...ありがと!」

そして僕とあの子は離ればなれになつた。

僕はあの時、助けてくれた女の子の後ろ姿を忘れない。

運命の出会い（後書き）

更新は二日～一週間くらいに一度になると思いま
す執筆速度が最悪なまでに遅いのです……。

よければポイントをつけてやってください。感
想・要望・批判・アドバイス是非何でも書いてください。その一
言が作者の原動力となり頑張ることができます！

少年の変革、そして旅立ち（前書き）

連投！

少年の変革、そして旅立ち

両親が事故に遭つた……。

イジメられていた日々から抜け出し、よひやく手にすることができた楽しい日常が崩れる出来事だった。

両親がいなくなつた僕は母方の家に引き取られることになり、生まれ育つた川神市を旅立つことになった。

あの日を救いだしてくれた少女を忘れないためにも僕は初めて拳を握つた。雨の日も風の日も拳を振り続けた。最初は見様見真似で始めたことだったが時が経つにつれて、ただのパンチは完成された正拳突きに変わる。

パンチだけと思われるかもしれないが、あの時僕が少女の動きの中で辛うじて見えたのが正拳突きと呼ばれるものだったからだ。

ある日僕は薄汚れたノートを見つけた。中には体が小さい男の人が満身創痍になりながらも戦い抜いた記録と雑誌から切り抜かれたスナップが貼つてあり、ノートの端々には『陸奥 九十九』と書かれていた。

「……じいちゃん?」

すぐに祖父に尋ねた。すると祖父は微笑みながら話してくれた。

自分が1000年もの間不敗を誇る古武術《陸奥圓明流》の伝承者だったこと。その古武術を用いあらゆる場所に、ある時は海外へと足を延ばし戦つたこと。その中で出会った人々のことなどを僕に語ってくれた。

祖父の話を聞いているうちに僕はある思いが生まれた。

「僕も強くなれるかな?」

自然に出た言葉だった。

「強さにはいろんなモノがある。伊織、お前はどうして強くなりたいと思った?」

川神市に住んでいた時にイジメに遭っていたこと。出合った少女に助けられたこと。その少女を思いパンチ（正拳突き）の練習をしていくこと。自分の思いを全てうちあけた。

「やうかうか…強くなりたいんだな?」

話しが黙つて聞いていた祖父は僕の頭を撫でながら聞いてきた。

僕の答えは決まっていた。

「うん!僕強くなりたい!…」

「お前の覚悟聞き聞けた。俺が強くしてやる

祖父の下で修行することになり、その日から強くなる為の鍛錬が開始された。

修行が始まると技などを教えてくれると思っていた僕の考えは甘かったと知ることになる。体づくりと称してひたすら走らされ、その後は器具を一切使わずに筋トレをする。

そんな日々が5年続いた。

「じいちゃん今田も行つてくる」

ストレッチも終え祖父に話しかけた。

「伊織帰つてきたら俺と試合だ」

僕は歓喜した。どれだけ頼み込んでも「まだだ」と言い組み手すらしてくれなかつた祖父が試合をしてくれると言つたからだ。

どれだけ待ち望んでいたことか……帰つてきた僕は意氣揚々と祖父との試合に臨んだ。

結果は完全なる敗北。手も足も出ず、触れる」とすらできなかつた。

「じいちゃん強すぎ……」

僕の言葉を聞き祖父は笑いながら家に戻つて行つた。

走り込み・筋トレに加え、祖父との試合が日々課になつた。

その後も祖父に勝てず相変わらずボコボコにされる日々が続いた。

「これでどうだッ！！」

最近になつて僕の攻撃が徐々に当たるようになつてきていた。

「甘い！」

だが直撃しても大したダメージを与えられず反撃されていた。

攻撃が当たつた瞬間、力の方向に合わせ飛んで衝撃を逃がす。どれだけ重い攻撃もそれをされては意味がなかつた。

祖父の攻撃を同じようにして防ごうとしたが五回に一回成功すれば良い方で、ほとんどが失敗に終わり気を失うままでやり続けた。

一か月もすればできるようになり対処法もいくつか思いついた。そのなかの一つが投げ。

打撃と思わせ祖父の懷に入った僕に待つていたのは驚愕と痛みだつた。

腕を捕られ肘の逆関節を極められ投げられていた。

この時は手加減されていたけど、『陸奥圓明流』の組み技には『投げる』『極める』『折る』が一連の流れの中で同時に行なわなければならぬらしい。

祖父は決して口では何も教えてはくれなかつた。どんな些細なことをでも僕に受けさせた。

そこから自分で考え方べと言わんばかりに。

そして円日は流れ

「伊織お前は強くなつた。この試合…こやこの死合いで最後だ」

そう言つて構える祖父の姿に僕は震えた。

「お願ひします!!」

開始の合図なんてなくとも僕と祖父は同時に飛び出し、そして衝突した。

「はあはあ…やつた。じいちゃんに勝てた……」

何回、何十回、何百回、何千回と行なつた試合の中で『陸奥圓明流』をその身で受け、覚え、使い、極める。それを繰り返した僕は成長していく。

「伊織よひやつた。これでお前に教える」とはなくなつた

地面に倒れる祖父はそつと微笑んでくれていた。

「これからはお前が『陸奥圓明流』だ」

祖父は立ち上ると傍に置いてあつた道着を僕に手渡してきた。

「じいちゃん」「れは？」

「ワシが昔使つていた道着だ。使つてくれ」

「そつか……じゃあ、ありがたく貰つておくよ」

「」の時、鍛え始めた幼い時からの思いを告げなければいけない気がして口を動かした。

「じいちゃん、あのせ「行つて」と。好きにするところ」

祖父はわかつていたようだ。僕が川神市に……いやあの時の女の子に会いに行つとしていたことが。

「……グズツ……今田まで……ありがとう、グズツ……あつがとう」「……」

何年振りかに出た涙は、感謝の涙だった。

「はつはつは、舞子ツ！飯だ！伊織の旅立ちへの祝いに美味しい飯と酒を用意してくれ！！」

「わかりましたよ」

「この後、ばあちゃんが作ってくれた豪勢な料理を二人で囲んで食べた。

死合いで腕が折れた祖父の背中を流すために一緒に風呂に入った。

「この傷も、この痣も…全部いい思い出だよ」

そう僕の体には何年もの間、祖父との試合の中で出来た無数の傷や痣が残っていた。

「泣き虫小僧だったお前も一人前の…男の顔をするようになつたな

「やめてくれよ。泣き虫って言つたって昔のことだろ？」

「お前は

風の音に搔き消されてしまい祖父が何を言つたのかはわからなかつた。

祖父の顔を見ると何故か聞き返す気にはなれず、そのまま聞き流す感じになつてしまつた。

「じいちゃん」

「なんだ？」

「今日からは“陸奥 伊織”って名乗るよ

幼い日の少女を思い、祖父に鍛えられた僕の中に生まれた決意だつた。

「その箱は重いぞ？」

「いいんだよ。これは僕の望んだことだから」

一言一言交わした僕と祖父は風呂をあとにした。

翌日の朝、僕は祖父母が寝静まっている間に家を出た。直接会つてしまふと泣くかもしぬなかつたからだつた。

川神市へと向かおうとすると荷物の中に自分で入れた覚えのない包が入つてあることに気がつく。

「（なんだコレ？）」

包の中には「好きに使え！」と書かれた手紙と二千円のお金、それとまだ温かいおにぎりが入つていた。お金は祖父が、おにぎりは祖母が握つてくれたモノだろう。

不覚にも涙が出た。

「あつがとうございました————ツツツツ————」

振り返つた僕は深く頭を下げ大きく叫んだ。

できるだけ多くの感謝の気持ちを込めて……。

『1000年もの間不敗を誇る“陸奥圓明流”
それを名乗ると決意した少年は
いつたい何を魅せてくれるのか』

少年の変革、そして旅立ち（後書き）

まじめこの世界にいるのに原作キャラが出てこない
出てきたら、きたでキャラ崩壊になることが懸念されますが……気
にしない気にしてないww

感想等ばつちーーい！

舞台は川神市（前書き）

一人称・三人称がごちゃ混ぜであります！…つわっ、何をするや

（ r y

……どうぞ～

十数年振りに川神市に戻ってきた。

「ふう……ようやくか」

あの後川神市へ向け意氣揚々と出発した。だけど辿り着くのに一年以上も掛かってしまうとは思いもよらなかつた。

僕は川神市に行く手段として航路を選んだ。理由は一度船に乗つてみたかった！しかもなんとなく……これが間違いだつたんだ。

船に乘ろうとしたんだけどお金が足らなかつた。諦めきれない僕は川神市の隣にある七浜行きのコンテナ船に乗り込んだ。今思えば完全な犯罪なんだけどこの際どうでもいいや。

=====

約一年前。

長い船旅も終わりようやく辿り着いたと思った僕の視界に飛び込

んできたのは、七浜ではなかつた。よくわからない場所で聞こえてくる声も知らない言葉ばかりだつた。

「（あれ？）ココだ……？」

僕はおろかなことに七浜行きではなく、外国へと向かうコンテナ船に潜り込んでしまつていて。この時ほど「悪いことはやめやいけないんだなー」と思つた瞬間はなかつた。

もう一度コンテナ船に潜り込もうとは思わなかつた。何故か同じ日に呑う気がしたからだ。

船を降りた僕を待つていたのは言語の壁。お金を稼げりと働き口を探しても言葉がわからず、身ぶり手ぶりでは相手にしてもうえない日々が続いた。

どうこかしてよしやく話を聞いてくれる男を見つけることができた時は心から安堵した。

話を聞いてくれる男に僕はどこかよくわからない場所へと連れて行かれた。身体検査などを受けたあと、船に乗せられ違う国へと渡つた。

訪れた先で僕は「覚えられた仕事を毎日やり続けた。

最初は言葉がわからず苦労した。言葉を覚えだした頃には一ヶ月も立つていて、一向に払われない給金を不思議に思いだした頃でもあつた。

「あのや、ココのお給料つていつもりやるのかな？」

「給料つてお前……出るわけねえだろ。口にいるヤツは皆売られただんだ。ようするに奴隸つてことだ……」

「え?」

同僚だった男の言葉に僕は戸惑いを隠しきれなかつた。

そう僕は騙されていた。初めに出会つた男は仕事を紹介してくれたわけではなく、ただ僕を口の持ち主に売つっていたのだった。

戸惑いの後に込み上がつてきたのは怒り。

すぐさま雇い主（いや飼い主つて言つたほうがいいかな?）の所に乗り込み、ボコボコにしてやつた。働いていた期間のお金をしつかりと徴収した僕は、同僚の皆さんにお金を支払うように言い含めその場をあとにした。

行き先は決まつていた。

騙したヤツらをこの手で叩きのめす為に最初の街に戻つた。ようやく見つけることのできた人身売買の組織だつたけど、僕が着いた頃には跡形も無く消え去つていた。近隣住民の人々を聞くと『どのかの軍人のような人が突如現れ、何十人もいた男たちをものの數十秒で薙ぎ倒し颶爽と去つて行つた』のことだつた。

僕の手で潰せなかつたのは残念だつたけど、その軍人さんには感謝した。たつた一つの組織でも潰れれば被害者が減る。

目撃者的人に軍人さんの特徴を聞き、お礼を言うために探しまた。いくつかの戦場に赴き情報を集め続け苦労の末、ついにドイ

ツ軍の人だといふことがわかつた僕はドイツに向かった。

ドイツではひと悶着あつたものの、しっかりとお礼を言つことはできた。

何故か氣に入られた僕は短い期間だつたけど軍でお世話をなつた。十分にお金が溜まり、もう一度感謝の気持ちを伝えドイツを旅立つた。

=====

こうして一年以上の月日を経て、川神市に戻つてくることができた伊織だった。

「少年、少しよろしいかな」

背の小さな伊織に話しかける人物が。

「はい、なんでしょうか？」

振り向いた先に居たのは道着を着た、ビートなく強さを感じさせる男性だった。

「相当の使い手とお見受けした。ひと手合わせ願いたい！」

突然の申し出に伊織は少々困惑したが、相手の男が本気で言つて
いることを感じ取り了承した。

街中での果たし合いは周囲への迷惑になることから、場所を変え
た伊織と道着を着た男は数メートルの距離で真正面から対峙して
いた。

「お相手感謝する。名前を聞いてもよろしいかな？」

「伊織です」

伊織が名乗りを上げるのを引き金に両者は構えをとつた。

「ござりつ……」

頭部を狙つた右の回し蹴りが放たれた。比較的低身長な伊織の頭
部を狙つたものとはいえ柔軟な体から放たれる蹴りは速く鋭い。

それを難なく後方へと体を逸らして躊躇した。
が、それだけで終わらず男はコマのように回転しながら続けざま
に回し蹴りを放つた。

男はテコンドーの使い手、その柔軟な体から繰り出される蹴りは
キレがよく速い。

不安定な状態からでも蹴りを放つてくるが威力があり、直撃でも
すれば多大なダメージを受けてしまう。

それをわかっているのか伊織は、男の蹴り一つ一つを見切りで躊

し続いている。

頭部を狙つたアップトリヨチャギ（前廻し蹴り）は鼻先を掠めるかどうかの所で後方に仰け反り避ける。見る者がいればまるで舞つているかのような動きだ。

「ちい！」

まるで当たらない自分の蹴りに内心焦りを感じていた男だが、一度距離を取り気持ちを切り替えた。

攻め続けた男の額には汗が浮かんでいるが、見に回つていた伊織は汗一つ搔いていない。正面から対峙している二人の様子は対象的だつた。

しばらく睨みあいが続いが、先に動いたのは伊織。

男は接近する伊織を多彩な蹴り技で牽制したが、蹴りを見せすぎた為に全てを避けられいなされてしまう。

「なぜ当たらない。……ツ！？」

一度落ちつきかけていた男は再び焦りを感じてしまった。抜群のキレを誇っていたアップトリヨチャギは腰の入っていない蹴りになり、蹴りに脅威を感じられなくなつていた。

そんな相手の焦りを汲み取つた伊織は自分の間合いに入ると男の蹴りを上回る速度で、左上段廻し蹴り放つ。

冷静さを欠いていたとはいえ男も武道家の一人。避けることがで

きなくとも防ぐことはできる。頭部を守るより元にして腕を上げた。

「まだです！」

伊織が言葉を発すると同時に、男の頭部に向かっていた蹴りは突如軌道が変わった。

まさに電光石火。稻妻が走ったかのような軌跡を残し男の下半身に蹴りが突き刺さっていた。

「陸奥圓明流 紫電」

小柄な伊織の攻撃とはいえ、打ち下されたように繰り出された蹴りの威力は高く、直撃した男はその場に膝をついた。

「まだ、終わっていないよ少年」

母国でテコンドーの大会で優勝したことのある男には意地があった。なんとか立ち上ると男は続けて口を動かした。

「負けることは決して恥ではない……だが……自分の全てを出せずに終わるのは恥だ……！」

男はヨップチャギ（横蹴り）を放つ。今田……いや今までの中でも自身最高の蹴りを。

次の瞬間、蹴りが伊織の体を捉える。

男は笑っていた。

「少年…君の勝ちだ」

蹴りを放つた足は伊織の肘と膝に挟まれ異様な方向へと曲がっていた。

「ギリギリでした。紙一重で今回は僕に軍配があがりましたが、次はどうなるかわかりません」

伊織の言葉を聞いた男は片足とこづかえをなくし、その場に座り込んだ。

「ありがとうございます少年…いやファイター。願わくばもう一度闘いたいものだ」

「僕の方こそありがとうございました。その時はまたよろしくお願ひします」

座り込む男に礼をした伊織は手を差し伸べ握手を求める。男は笑顔で、満足のいった表情をしながら握り返した。

「いい仕合いじゃった」

真剣にぶつかり闘つた二人の武人に話しかける人物が

。

舞台は川神市（後書き）

なんちゅうやって戦闘回でした

おそらく現段階で限界の描写です……。

今後の成長に期待する…！

テコンドーの資料をくださったモーティス様ありがとうございました

た。

感想等ばっかりーーー！

訪れた川神院（前書き）

今日は短い話になります
会話文メインなのでお許しを……。

訪れた川神院

伊織とテ「コンドーの使い手の仕合いを眺める人物がいた。

「（ほう…アレを防ぎなお且つ折るとは…）」

攻防一体の伊織の動きに感嘆している。

「（はて、あの少年どこか見覚えがあるんじゃがのう…）」

伊織を見つめるその人物は老人だった。しかしだの老人ではなく、その身から歳をまったく感じさせない程の濃密な氣を纏っている。

目の前で繰り広げられた仕合いの主役一人に賛辞を送りながら近づいていった。

「いい仕合いじゃった」

昔聞いたことのある声。幼い頃に感じたことのある雰囲気。記憶に残っている人物の名は……。

「……鉄心さん！！」

伊織たちに話しかけた人物は、武神の名を我がモノとし引退してなお世界が恐れる川神鉄心その人だった。

振り向いた伊織の顔には満面の笑みが貼りついている。鉄心は溢れるようなその笑顔に見覚えがあつた

「もしや伊織君かの？」

「お久しぶりです。覚えていてくれたのですね！」

「久しいのう。立ち話もなんじやから、川神院に来なさい。そこにはいる御仁も川神院が責任を持つて面倒をみよう」

男は川神院に運ばれ丁重に看病されることになつた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

『川神院』それは武術の総本山と言われている。世界各地の自分の腕に自身のある武芸者がその看板を奪いにくることも珍しくはない。伊織と戦つた男もその一人だつたが、目の前に現われた兵と戦わずにはいられなかつたのだ。

「ほれ、これでも飲みなさい」

鉄心に出された温かいお茶を口に運ぶ。一年程とはいえ世界を飛び回っていた伊織にとつて久々に日本で飲むお茶だった。

「やはり日本で飲むお茶が一番ですね」

「その口ぶりから察するに、どこか海外にいたのかのう?」

伊織は祖父の家を出てからの経緯を全て話した。

「それは大変じゃつたろう。…伊織君が引っ越して百代は悲しんでおつたよ」

そう幼少期に伊織を救つた人物は鉄心の孫娘・川神百代だった。

「自分が悪いのですけどね。僕自身も悲しかつたです…百代さんはいますか?」

苦笑いをしたあと一瞬顔に影が出来た伊織だが、すぐに元の表情に戻り尋ねた。

「モモのやつは学園の友人たちと遊びに出ているんじゃよ。帰つてきたら伝えるとしよう。それはそうと今は何か武術をしているみたいじゃが……」

鉄心は先程目にした伊織の動きから武術に通じていることがわかつていた。

「ありがとうございます。……あれから僕は

説明中。

それで今は“陸奥”伊織と名乗っています

“陸奥圓明流”は時代の影に生きてきた古武術だったが、伊織の祖父『陸奥九十九』が世界相手に喧嘩を売り、結果を残したことによりてその名を轟かせていた。時が経つにつれ忘れる者もいたが、鉄心には覚えがあった。

「いつもモモの後ろをついて回っていた泣き虫坊主が、あの“陸奥”の後継者とは驚いたわい」

「僕自身が一番驚いていますよ」

鉄心の言葉に本心で応える伊織。誰かに助けられるしかなかつた幼少期の自分を思うと恥ずかしい気持にもなつた。

「ほつほつほ。ここの後何か用事でもあるかのう?なければ道場に着いてきてはくれぬか?」

「得に用事はないので行きます」

伊織はそう言つと湯呑みに残つていたお茶を飲み干すと立ち上がつた。

「それはよかつた。ルーも喜ぶじゃんつ」

「ルーさんも居るのですか?懐かしいなあ

ルーという名を聞いた伊織の顔はおもぢやをもひつた子供のよつな表情になつてゐる。

鐵心の思惑を知らない伊織は終始浮かれた様子で道場に向かつて
いつた。

道場には何十人の川神院の門下生・修行僧が鍛錬に励んでいた。年齢は上から下まで幅広く、女性の姿も見受けられる。

その中でも一際目立つ存在がいた。繰り出される拳は目にも止まらぬ速度で打ちだされ、振るわれる脚は空気を切り裂いている。その動きからはレベルの高さ、圧倒的な実力の片鱗が垣間見ることができた。

「ルーカの少しあるかのう」

「ハイ。何でしうか総代？……あれ君は？」

ルーは鉄心の後ろに隠れるようないる体の少年に見覚えがあつた。

「お久しぶりですルーさん。昔、小さい頃に何度かお世話になつた

」とのある伊織です

「おおー、覚えているよー。懐かしいネー。あれからどうしていたんだい？」

「ルーよ、今からこの伊織君の戦いを見たいのじゃがよいか？」

鉄心の言葉を聞いたルーの顔が一瞬変わる。

「伊織君とですか？たしかに見るかぎり強いとは思いますが……」

そこまで言ったルーは言い淀んだ。目の前にいる少年からはたしかに強さが伝わってくる。しかし体が小さく、まだ力もないだろうと思つたからだ。それに今、道場内にいる者達は川神院の中でも強い部類に入る。

「まだまだ修行が足りんのう。伊織君はあの“陸奥圓明流”的い手。見てみたいとは思わぬか？」

「“陸奥”ですか、実際に見たことはないですが名前は聞いた事があります。ワタシもまだまだですね……興味がわきました。少々お待ちアリ……」

そう言つとルーは一度この場から離れた。

「勝手に話を進めてしまつて悪いが、かつたかの？」

「見せるせじのものではないですが、お茶の御礼にやらせていただきます」

伊織は一度脱いだ武道着に着替え始めた。

祖父が若き頃に幾多の强豪たちと死闘を繰り広げ、血や汗が沁み込んだ大切な道着に袖を通す。

訪れた川神院（後書き）

口調などに違和感がのこりますが…。
もし口直せ！って思ひ箇所があれば、指摘ください

感想等ばつちーーい！

少年の実力（前書き）

なんちゃって戦闘回…。

少年の実力

ルーに連れて来られた数人の門下生・修行僧は表情を曇らせた。

「ルー師範代……」のよつたな小さき者と戦えと仰るのですか？

その中の一人がみんなの思いを代表するように口を開きそう言った。それもそうだろう、彼らの目の前にいる伊織の身長は160？程しかなくお世辞にも普通とは言えない小柄な体をしていた。童顔であることも合わせあって見る人によつては小学生高学年～中学生くらいにしか見えない。

「ワタシもさつきは思つたことだが、人を見た目で判断するのはよくないことだヨ。彼は強い、油断していると足元をすくわれてしまうヨ？」

ただ彼らの思いとは裏腹に伊織には実力がある。

「師範代がそこまで仰るならやりましょう」

ルーの言葉を聞いた門下生・修行僧は渋々といった様子で了承した。

「……怪我をさせてしまう可能性がありますが、それでも構いませんか？」

「構わんよ。その時は川神院が全責任をもって彼の面倒をみよう」

まだ口を開じない門下生たちを黙らせるように、これ以上相手（伊織）をバカにさせないために鉄心が口を挟んだ。

「許すもなにも、気にしていませんから大丈夫ですよ」

自分と戦わされる門下生たちの気持ちがわかるのか、伊織は本当に気にしていない様子でルーの言葉に返事をするとストレッチを始めた。最後に笑いながら「それに慣れます」と付け加えた。

ストレッチが終わり道場の真ん中に立つ少年からは、先程までの子供のような雰囲気は無くなっていた。そこには一人の武道家……いや、陸奥圓明流第41代伝承者“陸奥”伊織がその小さな体からは似合わない量の鬪気を出しながら立っている。

「いいまで雰囲気が変わるのは別人じゃな。実際に楽しみじゃのう」

「ええ、やはり彼は強い。体から出る氣の量が凄い」

鉄心とルーは互いに思ったことをそのまま口にする。

「それでは試合をはじめるよ。審判はワタシが務めさせてもらひ。両者共に正々堂々と戦つよつこでは始めシシシ……」

ルーの開始の合図を聞くと伊織は礼をし構えをとつた。

「陸奥伊織です。よろしくお願ひします！」

「よろしく頼むよ。……はあつ……」

門下生の男はさう言つと力任せに攻撃を仕掛けた。男の身長はおよそ190?、対する伊織は160?前後。身長差は30?もあり上から振り下ろすような正拳突きを打ち出している。体格の差に大きなアドバンテージのある伊織に対して力で押せば叩き潰せるだろうと考えた行動だった。

周囲の人間から見れば小柄な伊織が押されていくように見えるが実は違っていた。

「（へつーなんだ）「イツはー？まるで……昔のみつだしち……」

実際に押されているのは門下生で、しっかりとガードを固め攻撃

を防ぎながらも伊織は足を前に出し前進している。手を出し攻めているのは門下生だが、ジリジリと後退を余儀なくされていた。

自分が後退していることに焦った門下生は力を込めようとした大きく振りかぶってしまった。

戦闘が開始されてから一番大きなモーションになり、それを伊織が見逃すわけもなく一瞬で問合いで詰める。

「え？……」

それ以上の言葉は聞こえなかつた。伊織は門下生に接近すると顔に掛け下から突き上げるようこ拳を出していた。

伊織の攻撃が直撃した門下生は脳を縦に揺られ氣を失いその場に倒れ込んだ。

「そこまで一勝者・陸奥伊織！――」

冷たい道場の床に寝そべるよつて倒れる門下生を見てルーが試合の終了を告げる。

「ありがとうございました――」

大きな声を出し礼をした伊織を周囲にいる門下生たちはどよめき、驚愕の表情で見つめていた。

「むら（門下生）が負けた」とではなく、内容が内容だったためである。

体格に恵まれていない伊織よりも30?以上背の高い男の…それも門下生・修行僧の中でも力>パワー^くのある男の打撃を受けつゝも全く動じることのない気持ち>ハート^く。防ぎきる硬い守り。前進しながら隙を見つけるなり一瞬で間合いを詰めた脚力。勝負を終わらせた一撃。

すべてにおいて予想を上回っていた伊織の実力を目の当たりにした、門下生たちは自分たちの考えが甘かつたことに気付き認識を改めさせられた。

「続けて試合を始めるけどいいかな?」

「ええ、大丈夫です」

そう答えた伊織は汗1つ搔いていなかつた。

「では、次の試合をはじめの一戦者前に出て、始めッッッ！……。」

「陸奥伊織です。よろしくお願ひします」

先程と同じように礼をすると構える。

「よろしく

伊織と対峙している男も構えをとった。今回の対戦相手は伊織の出方を見るように、守りを主体とした構え。不用意に攻めてカウンターをもらってしまい倒れた門下生を見ていたためである。

「これでは勝敗がつきませんね……僕からいかせていただきますー！」

男の思惑を見抜いていた伊織だったが、前進し間合いを詰め攻勢につって出た。

小さな体からは正拳突き・廻し蹴りなどの様々な打撃を相手のガードする腕の上から叩きつけていく。

「（ぐう……やはり攻撃が重い……だが）」

自分に襲いかかってくる攻撃をガードをさらに固め耐えた抜いていた。そこに伊織の頭部を狙った上段廻し蹴りが迫る。

「モーッツーーーーー！」

門下生は自分を守る腕を1つにし、左から迫る廻し蹴りを間合いを詰めながら受け止め、カウンター気味に正拳突きを叩きつけようとしていた。

ガードする左腕に伊織の右脚が触れる同時にことは起こった。

男の頭部に蹴りが突き刺さっていた。それも右脚の蹴りではなく、左脚での蹴りが……。

「バカ、なつ……」

始めての蹴りとは違ひ逆方向からの蹴り、意識の外からの攻撃を受けてしまった門下生は崩れ落ちた。

「…そこまで！勝者・陸奥伊織！…」

ゴールの後、道場内は静まりかえっていた。

一試合目の門下生とは違い、今回の男は油断することなく試合に挑んだ。だが結果は見ての通り、手も足も出ないまま何が起きたのかわからないまま勝敗は決してしまった。それは彼らの心を揺るがせた。

これまでの試合を黙つて見ていた鉄心が口を開いた。

「少しばかり休憩を挟んでもよいかの？」

「僕は構いません。緊張していたのでトイレに行きたかったんですね」

「では10分間の休憩の後、試合を再開する

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

休憩に入ると伊織は急ぎ足でトイレに向かっていった。

「試合中とは、まるで別人ですね」

伊織の後ろ姿を眺めながら思つたことを口にする。

「やつじゅのひ。…ルーミ、あの蹴り見えたかの？」

鉄心は一度微笑んだあと、真剣な表情に切り替えると尋ねた。

「ハイ。あの廻し蹴りを見切れた者は、この中でワタシと総代の人だけでしょう」

「廻し蹴りがくると思った瞬間、逆方向からもう一つの廻し蹴りが襲う。それも左右同時に」

「あれが陸奥の技なのでしょうか？」

「違いますよ」

鉄心とルーの会話にトマレから戻ってきた伊織が口を挟んだ。

「ではあの技は伊織君のオリジナルかい？」

「あれは修業中にじいちゃんが使ったことのある技なんです。昔、自分と戦つたことのある人が得意といっていたものらしいです」

伊織はルーの質問に包み隠さず答えていく。

「一回の試合をおこなったのじやが、未だに陸奥の技を出していいとはのつ…恥ずかしいかぎりじや」

「トップクラスの武道家ではありませんが、やられたのは川神院の門下生。やじらの武道家よりは強いはずなのですがね」

鉄心は川神院総代として、ルーは川神院師範代として田の当たりにした現状を嘆いていた。

「どうじゃルー、お前さんが戦つてみるかの？」

「よろしいのですか？」

「伊織君よいかのう？」

「僕としては師範代のルーさんと戦えるのは光榮なことです。是非お願いします！」

鉄心の提案を快く受けた伊織は氣を引き締めた。試合中と同じ表情になつている。

「決まったの。それでは次の試合はわしが審判をしよう」

突然決まった試合に道場内にいる門下生・修行僧の間に衝撃が走つた。

「よろしくお願いしますルーさん！..」

「ワタシの『アロシク頼むよー』

伊織とルーは互いに礼をした。

「では始めよつかの。ニヤニヤ常によじめいつーー。」

『陸奥伊織 対 ルー・イー

これまでの試合とは違う内容の戦いが見られるだろう

少年の実力（後書き）

次の更新は明日以降になります
すみません……。

感想等ばっかりーい！

陸奥の名（前書き）

更新が遅くなりスミマセン…。
内容に不安もありますがどうぞ。

川神院道場内は静寂につつまれていた。門下生・修行僧たちが見つめる道場の中心には一人の武人が向かい合って立っている。陸奥圓明流・陸奥伊織と川神院師範代・ルー・イーの一人だ。

開始の合図がされ両者は構えをとると、相手の出方を窺つようこピクリとも動かなくなつた。見ている者にもわかるくらいの緊張感が場を支配している。

「いひして対峙すると改めてルーさん、貴方の強さを実感します」

「ワタシにもキミの強さがわかる。本当に別人みたいだネ」

拳を一度も交えていない状態でも互いに対峙している相手の強さを察している。だからこそ安易に仕掛けることができず、時間だけが過ぎているのだった。

先程まで汗一つ搔いていなかつた伊織の額には僅かだが汗が滲み出でている。勇敢なのか、はたまた若さによる無謀なのかわからぬいが先に動いたのは伊織。

「陸奥伊織！参ります！」

奮い立たせるために己の名を呴きルーとの間合いを詰める。試合が動いた瞬間だった。

持ち前のスピードを生かしルーに詰め寄ると右の上段廻し蹴りを

放った。それと同時に放たれる逆足での廻し蹴り。《双龍脚》一本の脚を龍に例え左右同時に廻し蹴りと言つ名の頸^{アギ}で相手を食い破る。

「その技は一度見せてもらつたヨ！來るのが分かつていれば避けるのも容易い」

ルーは上半身を後方に逸らすことでいつも簡単に伊織の蹴りを避けた。

「そうみたいですね」

伊織がそう言つるとほぼ同時にルーは動いていた。自らの拳を鉄槌に変え、脚を鎌に変え伊織に襲いかかっていく。

嵐のよつな勢いの攻撃だつたが伊織はその一つ一つを完璧に見切り、難なく避け続けた。

川神院に訪れる前に見せた舞いのような動きをルー相手にも伊織はしている。

「単純な攻撃は僕には当たりませんよ」

眼前を掠めるよつに過ぎゆく蹴りを臆することなく見つめながら言葉を紡ぐ伊織。

逃げ続ける獲物を狩るようにルーのギアは上がり攻撃の速度が増していく。

伊織は徐々に余裕が無くなつていきルーの攻撃は掠めるよつになる。今も頭髪を掠め焦げたよつな匂いに顔を顰^{しが}めている。

「遂に捉えた耶ー。」

伊織の一瞬の隙を見逃さずルーは師範代に昇り詰める為に振り続けた拳を伊織の体に叩きつけた。

伊織の体に拳が当たるとそのまま追い打ちをかけるように蹴りを放つ。

流れるような攻撃が直撃した伊織の体は空中に放り出され真横に吹っ飛ばされていった。

見ている者たちからは感嘆の声があげられている。それもそのはず、師範代の肩書を持つルーの攻撃が直撃したのだ。骨折していくも不思議ではない。いや、骨折で済めば良い方、……。

「やはりネ。当たった時の感触がほとんどなかつたヨ」

伊織が昔、苦戦を強いられていた技だつた。

「陸奥圓明流・浮身」

「それは防御用の技だネ？力の掛かる方向に合わせ飛び、受けた際の攻撃の衝撃を逃がす」

ルーの攻撃を完璧に見切れる伊織だからこそできたことだつた。

「全でお見通しのようですね」

「よつやく陸奥の技を引っ張りだすことができたようだ」

そう川神院に訪れてから伊織が始めて陸奥圓明流を使つたのだ。

「それでも…わかつただけでは破れない」

「そつでもないネ。対抗策はあるヨ…ホオオ…アタアツ…」

ルーは気合を入れると伊織に襲いかかつた。

門下生たちには、ルーの拳が…脚が…まるで消えたかのように感じていた。実際に空気を切り裂きながら猛威を振るうルーの攻撃はほとんど見えない。

先程以上に速さを増した攻撃は伊織の体を捉える。

だがその攻撃すら伊織は完璧に見切ると浮身で防ぐ。胴を狙つた

蹴りに合わせ左に跳んでいく。

「甘じネーまだヨー……」

ルーは空中を飛ぶ伊織に接近すると体を掴みそのまま地面に叩きつけた。

「がはつ…………！」

勢いよく床に衝突する伊織の体……。

「これが1つ目『衝撃を逃がす際に必要な空間を『『えない』』

ルーの言つ通り浮身には弱点があった。

今度こそ勝敗は決したように見えた。

が、伊織は体の痛みを訴える部分を押さえながら立ち上がると再び構えをとった。

「僕は…………」

“陸奥圓明流”を受け継ぐ者として、自分を鍛えてくれた祖父への感謝を示すようにして、そしてなによりも幼い日に出会った少女のように強くなると誓つたから……

「絶対に負けられない！－陸奥圓明流－陸奥伊織、参る…………！」

口上に“陸奥圓明流”と付けたのは単にカッコつけたのではなく、今から人殺しの技を使うという意味だった。

一気に変わった伊織の雰囲気を察したルーは警戒を強めた。いつ、どこからでも来てもいいような柔軟な構えをとつてい。

そんなルーに先程までとはまるで違う速度で肉薄していく伊織。詰め寄った伊織は急所目掛け次々に攻撃を繰り出していった。

「スピードが上がったところだ、どうということはないネ！」

そう言うルーは伊織の攻撃を受け流している。それでも伊織は攻撃の手を緩めずに、勢いを増してルーに襲いかかる。

1つ1つの攻撃の威力が上がっていても、纖細さが欠けていては当たらない。受け流しつつもルーは伊織に接近していた。

「捕まえたヨ！ 冷静になりたまえ！！」

全てを薙ぎ倒す暴風のような攻撃を仕掛けてくる伊織の大振りのパンチに合わせカウンター気味に拳を放った。

「…………！」

ルーの放ったカウンターは当たつていたが、伊織はルーの腕が伸びる前に額で受け止めていた。

伊織が浮身を使うと思い込んでいて虚を衝かれたルーは一度距離を取る為に後方へと下がろうとしたが、それよりも速く伊織はルーに追いつがつた。

ルーは危険を感じた。死の恐怖を……

伊織の纏う殺氣はルー・イーが今まで経験したどんなモノより濃密で莫大な殺氣だった。

ルーは川神院師範代である前に一人の武人。恐怖に打ち負けるわけにはいかなかつた。

自らを奮い立たせる為、誇りを示す為に拳を放つた。一秒の間にいくつも放たれる拳は弾幕の如く展開された。

だが、そんな拳の壁の僅かな隙間を縫うようにして伊織はルーの体に接近していく。

自分の攻撃が届く距離。それは相手の攻撃も届く距離。比較的体の小さな伊織の射程は短く相手の懷に飛び込まなくてはならない。だが一度懷に入ってしまえば小柄な伊織には有利な状況を作りだすことができる。

そして遂にルーは接近を許してしまつ。懷に飛び込まれたルーは伊織の頭に肘を落とした。

次の瞬間体勢が崩れたのはルーだった。

「（なんだコレは？一センチもなかつたはずなのに……）」

ルーは必死にダメージを堪えパンチを繰り出す。それはルーだったからこそ耐えられた。

しかしその拳は力無く空を切つた。

いや、受け流されていた。

伊織はパンチを受け流しつつ、受け流した腕に自らの腕を巻きつけていた。残るもつ片方の腕でルーの襟を掴むと投げた。

バキィイイ！…！

その直後聞こえたのは、骨の音だつた。もちろん投げられたルーの体からの……。

「陸奥圓明流・蔓落とし（かずらおとし）」

道場に響くのは伊織の声だけで、門下生・修行僧の誰もが声を失つた。中には信じられないものを見た様子で目を見開いていた。

「や」まで一勝者・“陸奥”伊織！…！」

静寂を破つたのは鉄心の声。

「あらがとうございました！」

礼をするとい伊織は身に纏う鬪氣を納めた。

「痛てて、アリガトウございました」

「ルーよ氣を使わなかつたとしても、こいつ酷くやられたのう」

「ええ、最後は関節が極められていて逃れられずそのまま投げられてしましました。それにその前のアレをくらってしまったのはワタシのミスです。まだまだ修行をしなければ

ルーは試合の評価をすると、折れた腕に気を集め自然治癒能力を高めた。

「ルーさん大丈夫ですか？」

伊織は自分が折ったのを気にしてルーのもとへと駆け寄つていつた。

「大丈夫だヨ伊織君。これでも川神院師範代、これくらいの骨折はどうということはないネ」

ルーの言葉を聞いて安心したのかもう一度頭を深々と下げた。

「今日はありがとうございました！」

「伊織君頭を上げてくれ。ワタシの方こそアリガトウ。いい経験をさせてもらひったヨ」

そう言いつつルーは折れている腕とは逆の腕で伊織の頭を撫でた。

「子供扱いしないでくださいッ！…」

「ハハハ、やはりキミは戦っている時といない時はまるで別人みたいだネ」

ルーの言つ通りに伊織は試合中でこそ一人の武人として見えるが、終わってしまえば年相応もしくは年以下に見える。

「うう…ほつといてください！」

「今日はひれまでじやな。伊織和田せゆまつてこわなむこ」

「よん者の僕がいいのですか？」

「構わんよ。頼んだのは此方じやし、それにモモの客入じや。歓迎
しそひ」

「あつがとひいじあこます。ではお言葉にせんせてもひこます」

「夕食までゆいへつあるといえべ。門下生に部屋まで案内せよひ」

「ひつじて“陸奥”伊織として思ひ出の地・川神市に戻つてきてか
ら、ゆくつできたのは本田四度田の試合を終えてからだった。

陸奥圓明流の名を再び世に知りしめの発端の日でもあった。

陸奥の名（後書き）

描写の悪さに拍車がかかりましたが、なんせやつて戦闘回も今回の話で一応終了です。

感想等ばつちーーい！

「田の終わり（前書き）

やつと更新でもました
駄文製造機と言われても仕方ない出来に

一日の終わり

「おいじじい！」

「モモ、帰つておつたのか」

鉄心をじじいと呼ぶ少女の名前は川神百代。武神とまで言われる鉄心の孫娘であり、現・武道四天王の一人。

「私のいない間に試合をしたそつだな」

どこから聞いたことなのかはわからないが、尋ねる百代の表情からは不満の思いが見てとれる。自分が戦えなかつたのがよほど不服らしい。

「うむ」

「門下生が負け、ルー師範代までも負けたそつじやないか。それも骨まで折られて」

「ルーの試合には言い訳にしかならぬがハンデがあつた。……じゃが、それでも情けないかぎりじやな」

百代にそう言ひと鉄心は一度溜息をついた。

「その相手つて何者なんだ？ハンデがあつたとしても川神院師範代は強い。そのルー師範代に勝ち、骨まで折れるヤツを私は知らない」

「お前さんの知り合いじゃよ」

鉄心の言葉を聞いた百代は瞬時に思考を巡らせる。

「……揚羽さん……いや、違うな。揚羽さんだつたならそもそもハンデなんていらない。それは他の武道四天王にも同じことが言える」

「いつも考へなくて、じれこゑるわ」と

「そうか… それは楽しみだ」

百代は気付いていた。川神院の中に知らない……いや、ビックか懐かしい感じのする気の持ち主が居ることに……。

知り合いであろうが、知らないヤツであろうが百代には関係がなかつた。ただ強いヤツと戦いたいとこりう思いで頭の中がいっぱいになつていたからだ。

そんな百代の思いを察したかのように、鉄心は釘を刺した。

「モモ暴走してはならんぞ。もし、した時は……」

「ちッ！わかつたよ」

そこで二人の会話は打ち切られ、互いの部屋に戻つていつた。

＝＝＝

今日のルーさんとの試合には勝った。けど、あれの試合には実際一つ大きなハンデがあつたんだよな。

互いの全力を出し切つて戦つて勝つたなら文句なく喜べるけどルーさんは氣を使わずに戦つていた。だからあの試合は引き分けかなと思つ。

もしルーさんが氣を使つていたら結果は変わつていたかもしねない。

「それでも、僕は絶対に負けられない……」

「ンンン……。

「どうぞ」

「夕食の準備ができましたので、食堂の方にお越しください

「ありがとうございます。今行きますので」

川神市に戻つてきてから一度もまともな物を食べていなかつた伊織は一度思考するのを止める、立ち上がり宛がわれた部屋を出ると門下生のあとを着いていった。

「陸奥殿は何故こちら（川神院）に？」

久々に食べれる日本食のことを考へてゐる伊織の前を歩く門下生が尋ねた。

「百代さんご飯ごとに来ました。昔にお世話になつたことがあったので

それを聞いた門下生は納得したような表情を浮かべる。

「わづだつたのですか。ですがお氣をつけください

「？？？」

門下生の言つた言葉を理解できていない様子の伊織だが、漂つてくる美味しそうな匂いで夕食の方に思考が傾き礼を言つと言葉の意味を聞き返さないそのまま食卓に着いてしまった。

食事中は皿の前に出される料理の数々をまるで吸い込んでいるかの速さで平らげていた。

「へいわいわいました

「口元合つたよひよかつたわい

「はい！久々の日本食だったので満足しました。寝泊まりする部屋から食事までりがとうござります」

「まつまつま、いいんじやよ。モノのヤシセつ帰つてきただい

鉄心の言葉を聞いた伊織は飛び付くよつと身を乗つ出した。

「ほんとですか！？あとで会いに行つてみます」

十数年ぶりに出会える時が近づいてきたのを、実感できた伊織の心臓の鼓動は自然と早くなっていた。

「つむ、わうしてやつてくれ。じゃが……」

珍しく歯切れの悪い様子の鉄心。

「なにか問題でもあるのですか？」

そんな鉄心の様子にいち早く気付いた伊織はなんとなくだが嫌な予感がした。

「会えば分かる」となんじやが、今モモは強者との戦闘に飢えておつてな、今日の出来事（試合）も知つておつた。気をつけるんじやよ

一瞬自分の耳を疑つたがすぐ理解すると聞き返した。

「それつてまさか…百代さんと僕が戦つてことですか！？」

「たぶんモモの方から仕掛けていくじゃねつな

「僕には戦う気がないし、あと毎回にも言つましたが百代さんに会いに来ただけですので」

「そつじやつたな。流石のモモでも戦闘の意思がないことを伝えられれば大丈夫じゅうつて。」

最後の言葉を聞き逃さなかつた。

「今、多分と言つましたよね？ちょっと！鉄心さん…ビームかして
くださいよ…！！！」

焦りと泣きが混じつた表情で鉄心にすがるよひする伊織。

「善処しよう」

不安にさせよつた一言を言い残し鉄心は伊織のもとから去つて
行つた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

鉄心と別れたあと伊織は一人葛藤していた。

百代さんの実力は噂で聞いたことしかないけど…なんかビーム撃
つとか、怪我を負つてもすぐさま直るとか、それはもう色々と…
。

そもそも僕は戦う意思なんてないんだ。それを伝えれば済む！…

。

…はず。

会こたいのは日々なんだけど田代さんと戦つなんて御免被る。

やうだ明日元じよりつー。

明日元は口々（三神院）から出て行かなければならぬから、その時西代さんと会おう。運がよければ戦わなくて済むし、もし戦闘になつちやつたらその時は逃げればいいしね。

とこりひとで今日は寝よりつー！

少し強引ではあつたが何とか答へがでた伊織はそのまま部屋に戻り睡眠をすることにした。

一日の終わり（後書き）

一人称みたいなものと、おそらく三人称が混ざり合った変な文章になつてしましましたがお許しを。

感想等ばっちこーい！

思い出の再会

「はははッ－待て－－－ッ－－！」

「嫌だああああああああああ－－－－－！」

笑顔で追いかける黒髪の美少女と必死の形相で逃げ惑つ少年。傍から見れば黒髪の美少女がお姉さんで少年の方が弟、仲の良い姉弟に見えないこともない。

「なぜこいつなつたああああああああ－！？」

ビームでも逃げる少年が七浜市で田撃された。

数時間前。

川神院の朝は早い。太陽が顔を覗かした頃から起床し、各自鍛錬を行なつてゐる。

伊織自身も日課である鍛錬の為に起きていた。今は道着に着替え終わり中庭でストレッチをしている。

「やつてるネー」

「ルーさん、おはよ「ひ」やります。昨日の怪我大丈夫ですか？」

ルーの腕を見ながら言った伊織だったが、違和感に気付いた。

「あれ？ その腕って…」

「もうほとんど治っているネ」

そう折れたはずの腕が普通に動いていた。

「腕よりコツチのが凄かった。あんな至近距離でこれほどの威力のある技を受けたのは初めてだ。それも気を使わずに」

服を捲ると陥没している部分が見えた。これは昨日の試合の中で決め手となつた投げの前に伊織が出した技によつて出来たものだつた。

「拳を当てた状態から、全身の力を一気に相手に叩きこむ。『虎砲』^{パワ}と言つ技です」

包み隠さず技の説明をする伊織。本来“陸奥圓明流”は明るみに出来ることのなかつた格闘術だつたのだが伊織の祖父によつてその名と技を知らしめた為、今更隠すこともないのだ。

「一度と食らいたくない技だネ」

ルーは笑いながらそう言つと伊織に組み手をしようとした提案した。

初めはルーの体のことを考えて断わらうとした伊織だがルーの「平気だよ」の言葉を聞き、断わり切れずに了承してしまつた。

組み手は全力ではなかつたものの昨日の試合に負ふとは思えないほどの見栄えで、近くを通つた者たちは一人の動きに釘付けになつてゐる。

「やうやう終わりにしよつ

「はいシー。」

互いに額べと拳を突き合わせるよつと打ち出し組み手を終えた。

「ありがとわざこましたー。」

「マチカラ、ありがとわ、いい経験になつたネ。朝食をとらうつか

「はい。つとその前に五代さんのお居場所つてわかりますか?」

「今は妹の一子と走りに行つてゐる」

「やうですか。では少し待つていてるので先に行つてください」

伊織はやうやく川神院の門べと足を運んで行つた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

百代がランニングから戻つてくるまでの間、する」とのない伊織は『もし、百代と戦えばどうなるか』といつ想像をしていた。

想像中

ボコボコにされた僕。その上に立つ百代さん。

想像終了

「やつぱ無理だよねえ……」

自分で想像したくせにかなり落ち込んでいる様子の伊織だったが、先程ルーとの会話のなかで出てきたある言葉を思い出すと何とか立ち直つた。

「百代さんに妹なんていったつけ？……ん？あれがそつかな？」

伊織の視線の方向には、少し離れた所からコチラ（川神院の門）に向かつて走つてくる一人の姿が見えた。

「ねえねえお姉さま、門の所に人が立つてゐるけどお姫さんかしら？」

武道着を着たボーテールの少女が門の傍に立つてゐる伊織の姿を発見すると一緒に走つてゐる姉に話しかけた。

「んー見たことは……ないな。私への挑戦者か？ワン子、先に行く

「ぞ」

「ワン子」と呼ばれた少女の返事も聞かず、伊織のもとへ近づいていく黒髪の美がつくほどの少女。

「（なんか嫌な予感が……）」

自分へと接近してくれる五百代と思わしき人物に一抹の不安を感じる伊織。

「お前挑戦者か？ そうでなくとも私と戦え！」

「やつぱつ……」

伊織の予感は見事に的中していた。

「もしかして五百代さんですか？」

冷や汗を搔きながら尋ねた。

「もしかしながら五百代だ。それがどうした？」

「…………」

「…………」

伊織と五百代の両者の間に何とも言に難い空気が流れれる。

「おーーーーお姉さま待つよ。……で、その人はだあれ？」

伊織たのもとへと遅れてやつてきたポーテールの少女。

「よくわからんが「トイシ強そつなんだ」

百代がポーテールの少女に気を取られ一瞬だが田線を伊織から逸らした。

「（チャンスー）ヒリあえず、戦略的撤退シー！」

「ち、ちょっと待てシー！」

百代の言葉を聞かず一田散に逃げ去つて行つた。

「お姉ちゃんがいるのー。」

少女の質問

「なんか面白そつだから追いかけてくる

もう言つて追いかけだす百代。

「また行つやつた……」

「やつぱつあんなしきつたねー

少女のもとへと来たのはルー師範代だった。

そして現在

「ハアハア……。も、もつ無理……」

追いかけっこ（必死）に疲れ果てた伊織はその場に倒れ込み百代が追いついた。

「やつと観念したか。さあ私と戦え！」

「ひらは伊織とは違う息一つ乱れていない。

「無理です。嫌です。勘弁してください。」

伊織は最後の力を振り絞つてできるかぎりの言葉を連ねた。

「却下ーーさあーー私とーー戦えーー！」

伊織の抵抗虚しく一文字で切り捨てられる。このあと5分程同じようなやり取りが繰り広げられた。

「何度も言わせるな。私とーーん？」

途中まで言いつと百代はることに気が付く。

「お前どこかで会つたことないか？」

「やつと話を聞いてくれる状況になつた。……僕のこと覚えてない

かな？百代さん……いいや、モモちゃん！」

「私をモモちゃんと呼ぶ男……あつ！もしかして伊織か？」

「ここにきて百代は今まで追いかけっこしていた少年が、幼い時に仲良くしていた少年だということに気が付いた。

「やうだよ。思い出してくれた？」

「全然気付かなかつた」

「十数年ぶりに会つたとしてもショックだよ」

言葉通りに顔に影を作り軽く涙目になりながら百代を見つめる伊織。

「いや……それは、あれだ」

百代はそんな伊織の様子に何かを言おうとするが中々言葉は見つ

からず、ますます慌てるところ懸循環。

「そうー久しぶりに会つたお前が昔と変わつたからであつてだな、私が気付かなかつたのはそのせいだ」

「変わつたかな？」

「そうだな。小ここ頃はもつといふ、見るからに弱そつた雰囲氣だつた」

「それはそれでショック。まあ本当のことだから仕方ないんだけどね」

五代の言葉に苦笑いをしながら答えるとしつかつと回を立つ。

「ただいまモモちゃん」

「あー……ねかえり」

思ひ出の中ではなく現実でよつやく田舎えた両者によつて紡がれていく物語は幕を開けた。

想い出の軒窓（後書き）

この話でプロローグは終わりです。

ここまでお付き合いありがとうございました！

今後も続く『開かれる修羅の門』をよろしくお願いします！

回つ出した歯車

世間からのはぐれ者が大勢いる親不孝通り。暴力、薬の売買、窃盗など法に触れることが横行している地域。

「た、助けてくれえ……」

顔面蒼白で救いを求める声を出す男の周りには仲間と思われる者たちが倒れている。あるものは腕の骨を折られ、あるものは顔の一部が陥没し、またあるものは恐怖のあまり白髪化している。

「…………」

男の声など気にせず腕を振りかぶり容赦なく叩きこんでいく。血が飛び散らうと相手の骨が折れようと一切手を緩めない。

「その辺にしておいたらどうですか？もっ行きますよ」

突如物陰からこの場に似合つかわしくない落ちついた声が響いた。

「……お前か。今行く」

落ちついた声の主に返事すると殴っていた手を止め振り返り闇に溶け込むようにこの場を後にした。

1週間程前

「今までどうしてたんだ？」

あの別れの日から十数年、何の音沙汰もなかつた友人と出会えた百代は率直に聞いた。

「んー そうだね、どこから話そつか」

伊織は百代に離れ離れになつてからあつたことを思い出話も混ぜつつ話した。

「そうか。だからそんなに強くなつていたんだな」

実際に戦つてはいないが百代には伊織のおおよその強さを感じ取ることができていた。

「まだまだだけどね」

人懐っこい笑顔で答えるとポケットの中からあるものを取り出す伊織。

「まだ持つていたのか」

「うん。これは大切なモノだし、僕にとつての誓いでもあるんだ」

伊織の手のなかにあったのはボロボロになつた帶。別れる際、一向に泣きやまない伊織に百代が渡したものだった。

「この後、一人は小さい頃の話を時に笑い、時に恥じらいながらも話していた。

「今日はもう遅いから川神院に泊まつていいくといい。じじいには私がから話をつけておく」

「ありがと。やつひりまわせりひよ」

「ああ、じゃあ帰るぞ」

七浜市から川神市もでの道程を笑いながら歩く一人の姿があった。

翌日の朝

「ふわあ……眠い」

朝日が昇りかけている頃に目を覚ました伊織は、日課である鍛錬に向かおうと眠気眼を擦りながら長年愛用している道着に袖を通して外に出た。

外はまだ気温が上がりつぱりまだ肌寒く、起きたての体には丁度いい眠気覚ましになる。

ストレッチで体をほぐしランニングを行いつと川神院の門をくぐったところである人物に会つた。

「おはよう伊織君」

「おはよう一子ちゃん。走りに行くんだつたら僕も一緒にいいかな？」

「うん。でも結構走るけど大丈夫？」

「大丈夫だよ。僕に構わず自分のペースで走つてね

一子は頷くと先に走りだした。それに続くように伊織が走りだす。

七浜辺りまで走つたあと折り返してきた一子は多摩川の河川敷で休憩していた。

「いつもこれくらい走つてくるの？」

田の前で体を動かし続ける一子に声をかける伊織。

「うん。田標があるから、そのために努力しないといけないの」

「田標？よかつたら教えてくれないかな

「川神院の師範代になつてお姉さまのサポートするの」

一子の言葉を聞いた伊織は微笑んだ。

「そつか。だつたら僕応援するよ。何か力になれることがあつたら
言つてね」

心からの言葉だった。目標は高いがそれに向かつてひたむきに努力する一子の姿を見て純粋に応援したくなつたから……小さい頃ヒ一口に見えた少女に近づくために必死だつた自分と同じようにがむしゃらに努力する姿に似ていたから。

「ありがと。じゃあさつそくいいかな?」

「いいよ。僕にできることなら」

「せやーっ!」

気合の入つた大きな声と共に前進する。力強く地面を蹴る脚は先程まで長い距離を走つて疲労が溜まつているものとは思えない。

勢いをそのまま拳に乗せ真つすぐに撃ちだす。手加減なんて微塵もなく全力をぶつけるよつた一撃だつた。

「思い切りと踏み込みはいいけど、まだ体重が乗りきつてない」

自分に迫つてくる拳を軽く受け流しつつ接近すると、下から掬い

あげる形で拳を突き出す。が、その拳は当たることなく相手の顎先数センチの所で止められていた。

「勝負ありだね」

静止したままの状態で声を出したのは伊織だった。真剣にはしているものの本当に攻撃が当たって怪我をしては鍛錬どころではないため寸止めで行なつていた。

「もう一回お願ひできるかな」

負けず嫌いな性格と前向きな思考の持ち主である一子は諦めずに繰り返し行なうことで成長する。短時間で彼女のタイプをおおよそ掴んだ伊織は嫌な顔一つせず頷くと元の位置に戻ると構える。伊織には付き合つてているという感覚はなかった。

「何度でも

回り出した歯車（後書き）

始まりました第一部！

書き直していたものがついに無くなりました

感想等ばっちりーい！

新たな出会いヒーロー（前書き）

前話から一週間程経過した話です

新たな出会いヒーロー

「田嶋のお礼に川神市を案内するわー！」

伊織の一田は一子の、この言葉から始まった。

一子の“田嶋のお礼”といつのは毎朝走り込みのあとに行なっている素手による手合わせのことだった。
伊織自身は付き合っているとこう感覚はないのだが、一子としては何かしたいらしく、考えた結果“川神市の案内”という形に収まつたのだった。

幼い頃に川神市に住んでいた伊織にひとつは懐かしい場所を巡るいい機会だと思い、この申し出を快く受けたこととした。

朝の鍛錬（走り込みと手合わせ）も終わり朝食を取つた伊織と一子は川神院を出て仲見世通りを歩いていた。

仲見世通りには多くの土産屋や、和菓子屋があり観光客などの姿も見受けられることができる。

「あれ？ ワン子じゅん」

伊織と話しながら歩いていた一子に話しかける人物が現われた。
一子たちが声のした方に視線を動かすとそこには和菓子屋の店員服を着た一人の少女が立っていた。

「チカリンだー。今日もお店のお手伝い？」

「そうなのよー。で、その隣にいる男の子は誰？子守か何か？」

一子と話しながらチラッと伊織に視線を動かしチカリンと呼ばれた少女は尋ねた。

少々失礼な聞き方だったが、彼女が子守と思つのも仕方なかつた。一子の隣に並ぶように立つてゐる伊織は同年代の男子に比べ身長が低く、童顔なため年下に見られてしまつのだ。

「彼は川神院に泊まつてて、伊織君つてこいつ。アタシと同じ年で決してその……」

「気を使わなくともいいよー子ちゃん。自分で気付いていいことだしね」

一子の考へてゐることを察した伊織はハハハと苦笑いのような表情をしながら、助け舟を出した。

「うわー、ごめんね伊織君。失礼なこと言つちやつたしあ説びにアタシの家の久寿餅でもご馳走するよ」

「いえいえ、ではお言葉に甘えてこ馳走にならうがな

「チカリンの家の久寿餅は川神市でも美味しいって有名なんだから
あ」

「じゃあ楽しみにしなくちゃだね」

「今はまだお客様もあまりいないから、好きな所に座つて待つて
て。あ、あとアタシは小笠原千花だから好きに呼んで」

そう言つと千花は店の奥に一度入つて行き、数分で店舗の久寿
餅を一人分とお茶を持って一人のもとへと戻つてくると、「食べ終
わつたら呼んでね」と言つて再び店の中に消えて行つた。

「なんだか忙しそうだね。あ、本当に美味しいや」

目の前にある久寿餅を口に頬張りながら素直に感想を話した。

「でしょ? アタシもたまにだけビロに食べに来てるんだあ」

褒められたのは久寿餅だったが、まるで自分のことのように喜ぶ
一子を見て伊織は微笑ましく思えた。

数分で平らげた二人は千花にお礼を言つと、また川神市を歩くた
めに店をあとにした。

「うん、そうだよ。あの頃の僕には本当のヒーローに見えたよ」

「それがお姉さま？」

そこから伊織は、過去の自分がどんなふうに過ごしていったか、その時出会つた……いや、突如現れた少女の事を全て一子に打ち明け出した。

L

「実はここなんだ。僕が変われるきつかけになつた場所は、そして

唐突に伊織は口を開くと続けて話出した。

「やっぱり何度も懐かしいなあ」

和菓子屋でお腹を満たされた伊織と一子は河原に来ていた。

伊織は嬉しそうに、それでいて大切な思い出を確かめるように子の質問に答える。

「少しほは聞いたことあつたけど、しつかり聞くのは初めて」

「ハハハ、僕にとっては大切な場所だからまた来たいな」

そのあと日が暮れるまで幼い頃の思い出を伊織が話し、それを一子が聞くという風景が多摩川の河原で見られた。

「止められない！ そう、俺は力を手に入れたんだあ」

言葉に狂気が宿り、手に込める力を強め、気を失った相手を殴り続ける。

過去の自分は弱者だった。だから強者に屈するしかなかつた。

強者になつた今は

「僕が……いや、俺が蹂躪する番だああああああ

獸の叫びは夜の街の喧騒に搔き消され彼に気付くものはいなかつた。

新たな出会いヒーロー（後書き）

チカリーン及びワン子の口調がグダグダに……おれ
なにか指摘があれば仰ってくださいませ

次はバトルの予感がする、のか？

1つの作品もまともに書けていないのに、もつ1つ別作品を書こう
としてる私はダメ作者……なんだろうなあ……

感想等ばっかりーい！

幽められた女と決意する少年

「どうすれば……」

ブツブツ咳しているのは川神百代。彼女は今、かつてないほど幽んでいた。

悩みの種となつてるのは最近になって川神市に帰ってきた少年。悩んでいる姿からは一見すると他の少年に恋をしている女のよう見える。

「「」ことだつたらあの時無理やつにでも戦えよかつた」

が、現実はそんなに甘くは言つてこないことは物騒な内容だった。

「「」

百代の知つてゐる少年はひ弱で泣き虫なじめられっ子だった。だが帰ってきた少年は強くなつていた。

目の前に現われた強者を黙つて見ていることはできるわけがない。それほどまでに百代は強者との戦闘に飢えている。

すぐにも襲いかかりたい衝動をどうにか抑えてはいるが、いつ暴走するかわからないような状態にあった。

相手が心良くなつての要望に応えてくれるならばここまで悩む必要はないが、戦いたい相手は『戦わない』と頑なに断わつていた。それで百代は諦めきれずじつやつて頭を抱えて悩んでいたのだった。

「くそー、どうすればいいんだ……頭を使うのは苦手だ。ううこう時はアイツの出番だな」

自分一人では解決策が浮かばなかつた百代は抱えていた頭から手を離し立ち上がると、川神院から飛び出すようにして駆け出して行つた。

「それで俺のところに来たわけね」

「そりなんだよ弟へお前なら何か良い案浮かぶだろ?」

百代が助力を求めたのは百代と同じくくらいの年頃の少年。弟と呼ばれてはいるが本当に血が繋がつてゐるわけではなく、百代が舍弟として可愛がつてゐる後輩であり、風間ファミリーと呼ばれるグループのメンバーの一人で頭の切れる少年・直江大和だった。

「こちなりそんなこと言われても困るよ姉さん

「それをどうにかするのが弟であるお前の役わりだろ？ というかどうにかしろ」

頼みごとをする立場の人間が言つ言葉ではないが、百代がここ今まで大和に頼るのは彼の事を信頼しているからだろう。

「……仕方ない。でも俺はその子を知らないから今度会わせてほしい。話はそれからだね」

一度溜息を吐きやれやれといった感じで頼みごとを受け入れた大和。だが嫌々受け入れている様子は微塵も感じられなかつた。自分が姉と慕う百代の悩みを解決できるなら助力を惜しまないと思う優しい心と、百代がここまで執着する少年のことが気になる個人的な興味からの言葉だつた。

「わかつた。今度連れてくるが悟られなによつこしてくれよ？」

「それは安心して。ファミリーで遊ぶ日にはばいいよ。俺からキヤップにも話しておく」

「それでこそ私の弟だ」

數十年前まで頭を抱えながら悩んでいた百代だつたが、大和の力を

借り解決の兆しが見え、今はカラカラと笑い大和の背中を豪快に叩いていた。

月明かりが照らす多摩川の河川敷

「今日はコレで終わりにしてよいか」

年季の入つた道着を身に纏つた姿で額に浮かんだ汗を拭い対峙している一子に話しかる伊織。

「ありがとうございました！」

「僕の方こそありがとうございました」

礼をした伊織と一子の様子を見る限り疲れきっているわけではなかつたが、こうして早めに鍛錬を終わらせることが多い。

「まだ元気みたいだけど体の使い過ぎには注意しないとね。いきます
ぎた鍛錬は体を壊す。だから適度に休まなくちゃ」

「でももっと鍛錬に励まないと川神院の師範代になれないから」

伊織の言葉を聞きながらも一子は今日の鍛錬を思い出しながら体を動かし続けている。決して無視しているわけではなく一子の焦りからくる行動だった。

「んー……僕と試合しよう。寸止めなしの真剣勝負を」

「え?
いいのー?」

突然の申し出に驚いた一子だったがそれ以上に伊織と戦えることが嬉しいらしく、眼をキラキラと輝かせながら聞き返す。

「うん。
でもこれで僕が勝つたらさつきつたことを守つてほしい」

伊織は真剣そのものだった。口調こそ穏やかなものだが、一子を見る目には強い意志が込められていた。

「今は一子ちゃんの得物がないからまた明日の夜この場所でしようつ

「わかったわ。何があつても明日は勝負してもうつか」

「約束するよ。あと今日は先に帰つておいてくれないかな?」

真剣な表情からいつもの人懐っこい笑みを浮かべる伊織。

「どこかに行くの?」

「昔、お世話になった人に少しね。鉄心さん達には帰りは遅くなるので、と伝えておいてくれたら嬉しいかな」

「じゃあ先に帰るね。あッ、ないと思うけど親不孝通りには近寄っちゃダメだって大和が言つてたから氣をつけてねー」

川神院に向けて帰つていく一子を見送った伊織は振り返り

「いつまでそうしているのですか?」

と小さく、それでいて怒氣を感じさせる口調で話しかけた。

幽める乙女と決意する少年（後編）

短くてすみません…次回更新時には5000文字…とこつ願望

感想ばっかりーい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6447p/>

真剣で私に恋しなさい！！ - 開かれる修羅の門 -

2011年7月11日14時44分発行